



世界文学全集 別巻 6

パール・バック

大 地

Ⅱ

大久保康雄 訳

河出書房新社

世界文学全集 別巻Ⅶ パール・バック Ⅱ



© 1960

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和 35 年 9 月 5 日印刷

昭和 35 年 9 月 10 日発行

定 価 290円

訳 者 大久保康雄

発 行 者 河 出 孝 雄

印 刷 者 中 内 佐 光

装 幀 原 弘

印 刷：曉印刷株式会社

製 本：新宿 加藤製本工場

本文用紙：日本製紙株式会社

同 納 入：株式会社大和屋洋紙店

クロース：日本クロース工業株式会社

同 納 入：株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京(291)3721~7

振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

大 地 II

第二部 息子たち(つづき)	三
第三部 分裂した家	一〇
年 譜	四三
パール・バックとアジア	(大久保康雄) 四六

大地 II

第二部

息子たち（つづき）

主要人物

王一（ワン・イー） 王龍の長男。王家の総領として財産保全にきゆうきゆうとしている能のない男。

王二（ワン・アル） 王龍の次男。打算的で商才にたけ、豪商王とよばれるようになる。

王三（ワン・サン） 王龍の三男。幼少から父に反抗して家を出、南の軍官学校に入り、軍人となる。母阿藍ゆずりの無口で、剛毅果断な性格の美青年。王虎（ワン・ホウ）將軍と畏怖される北方軍閥の巨頭となる。

みつ口 王虎將軍の腹心として忠勤をばげむみつ口の男。

鷹 王虎將軍の腹心。とんがり鼻の奇怪な顔の持ち主。のちに反逆をくだてる。

豚殺し 王虎將軍の腹心のひとり。

あばた 王虎將軍の側近に仕えるあばたの少年。王二の次男。

豹（バアオ）將軍 北方山岳地方の匪賊の頭目。

狐女 豹將軍の愛妾。後、捕われて王虎將軍の正妻に迎えられる。才知にたけた狐のような美女。匪賊に内通して王虎に殺さる。

二〇

黄金の秋風は西からさわやかに吹いてきて、農民たちは収穫にいいそがしい。満月は中空にさえわたり、人々は中秋節の近づくのをよろこんで、天に感謝をささげる準備をしていた。近年、一、二回、不作の年はあったが、大きな飢饉もなく、匪賊もふたたび鎮圧され、戦禍もこの付近まではおよんでこないで、人々はそれをよろこび感謝しているのである。

王虎も自分の地位や業績をかえりみ、去年よりも勢力が増していることを知った。城内や城外に宿営させてある部下を計算すると、げんざい彼のもとには二万人の兵がおり、銃は一万二千挺あった。その上、彼はいま軍閥の将領のひとりと目され、その名を世間に知られるようになった。戦後もうやら主権者としての地位にとどまることができた例の名ばかりの大総統は、現政府をくつがえそうとする南方軍と戦って彼の地位を守るため

に援助してくれた北方軍の将領に感謝状を送った。王虎も総統から感謝状と官位を贈られたひとりであった。王虎に贈られた官位は、あまり高いものではないが、ながしい官名でりっぱそうにきこえるし、ともかく総統からの官名である。王虎はこの榮譽を、一戦もまじえず、一銃も失うことなく、かちえたのである。

しかし、ただ一つ、大きな問題が残っていた。中秋節は貸借勘定を精算する時期である。王商人から、銃の代金を催促されて困っているから、至急、支払ってもらいたい、と再三言ってきたことだ。うるさくなつて王虎は、けんか腰になって、使者を王商人のところへやって、銃が途中でなくなったのだから、代金全部は払えない、と言わせた。

「ほんとうの受取人がどうかたしかめもせずに最初に取りにきたものに渡したりせぬよう注意をあたえておくべきではないか」使者にこう伝言させた。

この非難にたいして王商人は筋の通った返事をした。「わたしの自筆の手紙を証拠としてもつてきて、しかも、おまえのところからきたと言ったというのだから、どうしてそれをおまえの部下ではないと拒むことができるよう」

そう言われると王虎としても返答に困った。しかし彼

には頼みとする軍隊の力がある。そこで彼は強気に言った。

「損害の半分は負担しよう。しかしそれ以上は払えない。それがいやなら一文も払わないだけだ。このごろわたしは自分のやりたくないことはしないですむ身分になっているのだ」

王商人は思慮の深い男で、どうにもしようがないとすれば、あきらめのよい人であった。だから、王虎の申し出た条件を承知して、損害を半分引きうけた。自分が管理している王虎の土地の地代を引き上げ、拒絶されないとわかつている金融の利子をあげさえすれば、それくらいのもものは、すぐ埋め合わせがつくのだから、彼にとつては、けっきょくたいしたことではないのである。

一方、王虎は、たとい半分の代金にしても、最初は払う方法が思いつかなかった。膨大な軍隊の維持に莫大な費用がかかるので、毎月、いや毎日のように、おびただしい銀がはいってきても、すぐにまた流れ出てしまうのだ。

彼は腹心のものを部屋によんで、ひそかに言った。

「これまでにないような新しい徴税の道はないか」

腹心のものは頭をかいて、たがいに顔を見合わせた。あちこちをながめたりしていたが、何も考えつかな

かった。みつ口が言った。

「食べるものや日常品に重税をかけると、人心が離反しますからね」

それは王虎もよく知っていた。あまり重税をかけて、上から押えつけて食えないようにすると、民衆というのは命がけで反抗してくるものである。王虎はこの地方に相当の勢力をはり、地盤もかためたが、民衆をまったく無視できるほど強大なところまでは行っていない。だから、現在以上に大衆の負担にならないような新しい課税方法を考え出さなければならなかった。そこで、この町の主要産業である酒ガメの製造に目をつけた。この地方でできる酒ガメ一個について銅錢一個か二個を課税するのである。

この地方の酒ガメは有名だった。みごとに陶土をねって、青いうわぐすりをかけ、酒を入れ、同じ美しい陶土でふたをして密封し、銘を入れるのである。この銘は、美しいカメにはいつている銘酒として全国に名が通っているのだ。王虎はこれを考えついたとき、腿を打ってよろこんだ。

「酒ガメの製造業者は、いい儲けをして、毎年、富をふやしている。ほかのものと同様に税を負担しないという理屈はないじゃないか」

腹心たちも、これは名案だと、よろこんで賛成した。

王虎は、その日ただちにこれを施行することにした。施行にあたって、彼が主要な酒ガメ製造業者に、いんぎんに伝達させた説明の趣旨は、つぎのようなものであった。——王虎將軍は酒ガメの製造業者を保護した。酒の原料であるコウリヤン畑が無事でありえたのは王虎の努力のおかげである。もし將軍がコウリヤン畑を保護しなかったら、コウリヤンは荒らされ、酒ガメに入れる酒はつくれず、酒がなければ酒ガメの需要もなかったであろう。保護するには巨額の経費を必要とする。警備の兵隊を訓練し、武装させ、給与しなければならぬからだ。

この費用を捻出するために税金を徴収しなければならぬのである——。説明の言葉はいんぎんだが、その背後には、二万人の兵力と銃剣がひらめいていた。酒ガメ製造業者は、ひそかに会合して、大いに憤慨してみたり、反抗の方法をいろいろ考えてみたりしたが、しかし王虎には思いどおりのことをする実力がある。けっきょく、これは拒否できないだろうということになった。王虎よりもたちの悪い支配者もたくさんいることだから、とあきらめたのである。

どうしても仕方がないということになると、彼らは進んで税金を出すことを承知した。そこで王虎は腹心を派

遣して月々の生産を見つもらせ、税額をとりきめた。この税収入は、かなりの額にのぼり、王虎は三か月ほどのうちに、王商人に約束の銀を支払うことができた。こうして税の必要度は一時ほどさし迫ったものではなくなったが、そのころには酒ガメ製造業者もこの課税になれてきて苦情も言わなくなったので、その必要がなくなったとはけっして彼らに言わなかった。まったく、入手できるものは、いくらでも彼は取った。大望を果たす日まで、まだ道は遠いのだ。彼は野心にもえて、おちつかず、あれこれと多忙な日々を送っていた。

この地方の住民から、もうこれ以上税をとることはできない。これ以上とると人心が離反するとみてとったとき、彼は器の大きな自分には、いま占拠している地方は小さすぎる、来春には、支配する地域をもっとひろげねばならぬ、と思った。天は、いつ無慈悲に凶作をもたらすかもしれない。大飢饉にでもなれば、こんな小さな地域を支配しているだけでは没落してしまう。王虎がきてから、この地方一帯では、二、三か所、小さな凶作があっただけで、全面的な大飢饉は一度もなく、運がよかったが、さきざきのことはわからない。

やがて戦争のできない冬がおとずれてきた。王虎は、あたたかい冬ごもりの準備をととのえた。はげしい風雨

の日でないかぎり、彼は部下を外へ出して訓練させた。部下のうち、もつとも優秀なものをみずから訓練し、この連中に他のものを訓練させるのである。王虎が、とくに心を用いたのは銃の管理であった。毎日、数と種類を記入した帳簿を手にして、自分の目の前で、検査された。検査のときに一錠でも紛失しているようなことがあれば、その責任者を、ひとりでもふたりでも三人でも死刑にすると、つねに警告していた。だれも命令にそむくものはなかった。あんなにも愛していた妻をさえ、怒ると一刀のもとに斬り殺したことを知っているのに、人々には以前にもまして王虎を恐れた。そんなにまで怒ることができると思うと、彼の怒りが、ふるえるほどこわかったのである。王虎が黒い眉を寄せただけでも彼らは恐れてとび上がった。

きびしい北方の風が冬を送ってきた。外にも出られず、部下を外へつれ出して訓練することもできないような陰うつな冬の日々がつづいた。とうとう王虎は、かねて予期していたもの、いそがしくすることによって避けてきたものに、ぶつかってしまった。何もすることがなく、しかも彼は孤独であったのだ。

他の男たちのように、賭けごとに熱中したり、酒を飲

んだり、宴会をして騒いだり、女を求めたりすることでも心のうさを忘れることができたなら、どんなにいいだろう、と彼は思った。しかし彼にはそれができなかった。

彼は、にぎやかな宴席のごちそうよりも、簡素な食事のほうが好きだった。女は、考えただけでも胸くそが悪くなった。一、二度、賭けごとをやってみたが、賭けごとに向くような性分ではなかった。サイコロをやってみても、うまくは振れないし、いい機会をつかむのが下手だった。そして負けると腹を立てて長剣に手をかけた。だから、いっしょに勝負をしている連中は、彼の眉がびくびく動きはじめたり、口もとが不きげんそうにしぶくなると、びくびく恐れ、彼の大きな手が刀のつかにたれるのを見ると、あわてて王虎に勝たせてしまうのである。これではおもしろいはずはない。彼は退屈してどなる。

「いつもそう言っているように、こんなものはばか者のすることだ」王虎は勝負をしても、気持ち晴れることもないし、心がおちつくこともないから、ぶりぶりしてそこを出てしまうのである。

昼間よりも夜は、なおつらかった。しかも夜は、かならずくるのである。夜は、ひとりで寝た。ひとりで寝なければならぬから、昼よりも夜をきらった。もつと大きな苦勞がありながらも、なんとか人生にたのしみを見い

だして生きてゆく人もあるが、王虎は、そういう人のように歓楽を味わうことのできないたちで、苦痛の多い心の持ち主であった。王虎のような人間にとって、日夜、孤独に、さびしく暮らしているのは、決してよいことではなかった。また彼のような強健な肉体をもっている人間にとつて、ひとり寝の床もまた、けつしてよいことではなかった。しかも友とすべきものはひとりもないのである。

もちろん老県長は、まだ生きていて、肺病で死にかかっている老妻といっしょに奥のほうの建物に住んでいた。彼は人としては善良で学識のある老人であった。しかし王虎のような人物にはなれていないから、こわくてならず、王虎の前へ出ると、老いた両手を組んで、王虎が何かいうと、急いで、「そうですよ、閣下——そのとおりですよ、將軍」というだけだった。

王虎は、こんな調子でやられると、がまんできなくなつて、おそろしい顔で、にらみつける。すると老県長は、青くなつて、やせてひからびたからだにまごつた色あせた長衫を引きずりながら、できるだけ早く逃げだしてしまうのである。

それでも王虎は公正な人間で、老県長ができるだけのことをしているのは知っているので、なるだけ、かんし

やくを起こさぬように注意していた。かんしゃくが起きて、思わず自分の手がとんで老県長に危害を加えるようなことがあつては気の毒だと思い、かんしゃくが起きないうちに、いそいで老県長を目のまえから去らせることも、しばしばあつた。

そのほか腹心の部下もいる。三人とも、りっぱな勇士である。とくに鷹は、知謀にかけては、一千人の兵隊よりも役に立つ。けれども、けつきよく彼は無知な人間にすぎない。話題にすることといつたら、武器の持ち方とか、拳の使い方とか、敵に応接のいとまをあたえぬように左右の足を交互に蹴あげる方法とか、戦場で敵をあざむくための詐術とか、そんなことばかり、くりかえしくりかえし語るだけだ。どこそこの戦場で、ああしたとか、こうしたとかいう話を何度もきかされているので、王虎は鷹の価値を尊重してはいても、話相手としては屈なのである。

豚殺しは体当たりで大きな門を押し倒すほど巨大なからだ、大きなすばしい両拳を持つてはいるが、図体ばかり大きくて、気がきかず、訥弁で、冬の夜の話の相手としては、好適ではない。みつ口は戦闘にかけては、あまり優秀ではないかもしれないが、一ばん誠意のある忠実な腹心で、使者として派遣して用を弁じさせるには

最適任者であつた。しかし割れたくちびるから息をもらし、唾をとばしながらしゃべるので、冬に語る相手としては、けつして愉快ではない。あばたの甥は、一代代若いから、まともな話相手にはならない。王虎はまた兵隊たちにまじつて宴会で飲んだり騒いだりするようなこともしなかつた。將軍がそんなことをして部下に同じ人間だと思わせ、弱点をさらけ出したり泥酔したところを見られたりすると、戦場にのぞんだときに尊敬もしないし、命令にも服従しなくなるかもしれないからである。だから王虎は、いかめしい軍装に身をかため、いまだでは愛してもおり憎んでもいる例のするどい長剣を帯びなければ、けつして兵隊たちの前にあらわれなかつた。まさしくこの世に匹敵するもののない鋭利な名剣であつた。彼は、ひとりでいるとき、よくその長剣を抜き放つては思いにふけた。それは黒雲を真二つに斬るだろうとさえ思われた。妻ののどは、あの夜、雲のようにやわらかだつた。そしてその夜、この長剣は妻ののどを刺しつらぬいたのである。

かりに王虎に、目中、語りあう友がいたところで、一日の終わりに、かならず夜がくるのである。夜は、どうしてもひとりでないなければならない。ぼつねんと寝台に横たわるしかないのである。冬の夜は、長く、そして

暗い。

そのような暗い長い冬の夜、ときどき王虎は、ひとり寝ながらローソクをともして、少年時代に愛読し、功名心をかき立ててくれた三国志や水滸伝を読んだ。それに似た勇壮な物語を、いま彼はいくつか読んだ。けれどもさいげんなく読んでいられるものではない。ローソクが芯まで燃えおちるときがくる。彼は寒くなる。そして、暗い、つらい夜を彼はひとりで寝なければならぬのである。

この時間を、毎夜なんとかして延ばそうとするのだが、やはり避けられなかつた。愛する妻を思ひだす時間である。彼は悲しかつた。しかし、悲しみながらも、彼女が生きていてくれたらとは、けつして望まなかつた。彼女が、けつして彼が信じ胸襟を開いて真底から愛しうるような女でないことは、もう知っているし、たえずそのことを自分に言いきかせていたからだ。かりに彼が妻を許し、殺さずにおいたとしても、つねに彼は妻を恐れていなければならなかつただろう。そして、そのような恐れは彼の心を分裂させたであらうし、引きさかれた半分の心で榮達への道をすすんだところで、彼の大望を成就することはできないであらう。

夜、彼は自分にこう言いかけるのであつた。しか

し、それにしても普通の匪賊にくらべていくらかましなくらい、ただの無知な男にすぎない豹將軍が、どうして、あのただものとは思えぬ女の愛をかちえたのであろうか。豹將軍が死んだのちまでも、彼女は豹に愛着をもっていた。生きている自分が、あれだけ愛したにもかかわらず、女は死んだ彼を忘れなかったのである。そう思うと胸が痛んだ。

というのは王虎は、妻が自分を愛していなかったとは信じられないからである。彼がいま横たわっているこの寝台の上で、いかに彼女が情熱的で奔放であつたかを、いくたび彼は、むさぼるように思い起こしたことであろう。愛のないところに、あのような情熱がわきでてくるとは信じられなかった。生きている自分が、死んだ豹ほども彼女の心をとらえ得なかったとすると、これだけの地位があり誇りをもっている、どこか自分は、自分が殺した豹將軍よりも人間として劣っているのではあるまいか。そう思うと、気持ち沈み、気分がめいってきただ。もちろん自分が豹將軍よりも劣っているとは思えなかった。しかし、そうにちがいないと感じないわけにはいかないのである。

自分で思っていたほどの人間ではなかったと感じると、自分の前途が、いたずらに長く無意味にひろがって

いるような気がしてきて、はたしてえらくなれるのかどうか、疑わしくなってくる。かりにえらくなつたところで、その偉業を伝えるべき子供がない以上、すべては死とともにうしなわれ、持っているものは他の者の手にわたってしまったのだから、なんの役にも立たない。戦場でたたかったり、策略をめぐらしたりしてまで、何かを残したいと思うほど、兄や兄の子供たちを愛してはいない。彼は暗い静かな部屋のなかでうめいた。苦しいうめき声もれた。

「おれはあの女を殺したときふたりを殺したのだ。ひとりはおれがもつはずであつた子供だ」

それから彼は、ふたたび思いだす。すると、きまつて妻の死んだすがたが目にかんでくる。白い美しいのどをつき刺され、傷口から真赤な鮮血がほとばしり出ていく、その光景が彷彿として、いつまでも眼から去らないと、彼は、たまらなくなつてきて、急にこの寝台に寝ていられなくなるのであつた。もちろん寝台は洗ひ清められ、塗りなおしてあるから、どこにも血のあとはないし、枕も新しい。また、だれにもこの寝台の上で起こつたことを語らないし、妻の死体がどこで処分されたかも王虎は知らないが、とにかく寝ていられなくなるのである。起きて、ふとんにくるまって、暁の弱い光がほの白

く窓からさしこむまで、みじめな気持ちで椅子の上でふるえているのであった。

こうして冬の夜は、毎夜、同じようにすぎて行つた。とうとう王虎は、これではやりきれないと心に叫んだ。

こうした悲しい、わびしい夜がつづくと、しだいに気が弱くなり、大望も消えてしまふ、と気がついたからである。彼は自分で自分が恐ろしくなつてきた。何にたいしても興味がもてず、そばへくる人にたいしても、いらして、すぐかんしゃくを起こすからだ。とくに、あばたの甥にたいしては、かんしゃくをおこしてつらくあつた。彼は苦々しげに言つた。

「こいつが、おれの縁つづきでは一ばんましな人間なのだ。この、にやにやした、おどけたあばた猿が——この商人の子が——これが自分に一ばん近いのだ」

ついに、ほとんど発狂するのではないかと思われたときになつて、彼の心の一つの転機がおとずれた。彼は、ある夜、ふと思つた。もしあの女が生きていれば、きっとそうしたであろう破滅への道、死んでしまつたまいも、なお彼女がたくらんだとおりの破滅への道を自分は進んでいるのでないか。そう気がついたとき、彼は突如として立ち直つた。そして、妻の亡霊にいとむかのように心のなかで言つた。

どんな女だつて子は生めるではないか。おれは女よりも子供がほしいのだ。そうだ、子供をもうけよう。子供ができるまで、ひとりでもふたりでも三人でも妻を持つ。いつまでもひとりの女に恋着しているなんて、おれは、ばかだった——最初は父の家の奴隸の梨華だった。よく知りもしないし、奴隸に話すような断片的な言葉をかわたことしかないあの女を思いつづけて、ほとんど十年近くも胸をいため苦しんだ。そのつぎは、どうしても殺さねばならなかったあの女だ。この女もまた、いつまでも忘れることができずに、あと十年間も未練に苦しむのか。十年も苦しんでいたら、子供もできない年寄りになつてしまふではないか。いや、おれも、ほかの男のようになる。ほかの男のように自由になれるかどうか、ためしてみよう。女を手に入れて、氣にいらなければ、いつでもすてるのだ。

あくる朝、王虎は、みつ口を自分の部屋へよんで言つた。

「おれは女が必要だ。まじめな女なら、どんなのでもよい。兄のところへ行つて、妻が死んだから、新しい女房をさがしてくれるように頼んでくれ。いづれ春になれば戦争がある。おれはその準備でいそがしい。それ以外のことで氣を乱したくないからと言つて頼んでくるのだ」

みつ口は、よろこんでこの使命を帯びて出発した。彼は王虎將軍の苦しむようすを嫉妬深い目で見て、いくらかその原因を察していたから、これはよい治療法だと思つたのである。

王虎は、運命と兄たちとが、どんな妻を見つけてくれるか、ただ待つだけであつた。待つてゐるあいだ、彼は戦いの計画に没頭し、勢力を拡張する方法を思いめぐらした。夜、疲れて眠れるように、うんと頭を酷使したのである。

二一

みつ口は、彼のような特長のある人間が、あまりしばしば往復すると人目について怪しまれると思うので、間道づたいに旅をつづけて城内へはいり、王家の兄弟が住んでゐる宏壮な屋敷へたどりついた。ほとんど昼近い時刻で、王商人は事務所のほうへ行つてゐるということであつた。一刻も早く使命をつたえるために、すぐ事務所へ急いだ。王商人は市場に面した自分の事務所の小さな暗い部屋で、船に積んで出荷した小麦の利益を、ソロバンではじいていた。彼は顔をあげて、みつ口の話に耳を傾けた。聞き終わると、びっくりしたように細い目をみはり、うすいくちびるをすぼめて言つた。

「いまなら嫁をみつけるより銀を用立てるほうが楽だよ。どうすればさがせるか、わしはぜんぜん心あたがない。せつかくもらつた嫁を亡くすとは、まずいことをしたものだ」

みつ口は、自分をわきまえていることを示すために、低い椅子に、ななめにへりくだつて腰をおろし、丁寧に言つた。

「わたしがお願ひしたのは、將軍にめんどろをかけたないで、將軍に愛されるような婦人をさがしていただきたいということでございます。將軍は、ふしぎなほど一途な性質で、一つのことを思いこむと、まるで狂氣のようになりがちでございます。亡くなった奥方を愛しておられて、いまだに忘れないのです。もう幾月にもなりますが、いまもつて忘れられずに思いなやんでおられるのです。そんなに思ひつめては、おからだにさわれます」

「弟の嫁は、どうして死んだのかね」王商人は好奇心にかられてたずねた。

みつ口は、もうすこしでほんとうのことを答えようになつたが、王虎に忠実で、思慮の深い男だから、すぐに思ひとどまつた。軍人ならともかく、戦争になれていない人は、殺すとか死ぬとかいうことには堪えられず、吐き気をもちやすさうだ。兵隊は敵を殺すのが仕事で、殺さ